物語3

教材のねらい

1 選定の理由

「平家物語」から一編「木曽の最期」と参考教材「祇園精舎」を扱う。「平家物語」は軍記物語の代表的作品であり、その中に描かれている源平の争乱は日本の歴史を考えるうえでも重要な位置を占める。また、この中の数々の逸話は、古来、語り継がれてきた国民的教養とも考えられ、例えば「判官びいき」という言葉はいまだに日本人の心性を表すものとして使われている。「木曽の最期」は英雄の中にもある人間的弱さ、強いきずなで結ばれた人間同士の相手を思う気持ちなどが、現代の我々にも共感できる教材である。冒頭の「祇園精舎」は、「古文の窓5　和文と和漢混交文」も併せて読み、音読させる、平曲を聞かせるなどして、物語全体の基調をなす文章を味わわせたい。

「単元の言語活動6　人物の心情を想像して「木曽の最期」を脚本化する」は、登場人物の微妙な心の動きを巧みに描写した名場面をシナリオ化し、声に出して演じることで生き生きと表現することをねらいとした。

2 指導のねらい

「木曽の最期」は、ドラマティックな場面を取り上げているので、ストーリーの展開や、義仲・巴・兼平主従の心の交流と最期のときなど、登場人物の心情をしっかり把握させることを主眼としたい。長年にわたって人々の心を震わせてきた物語を読み味わい、現代に生きる生徒たちにも指針となるようなものをつかみ取らせる。

「単元の言語活動6　人物の心情を想像して「木曽の最期」を脚本化する」では、声に出して演じることで、人物の心情について想像力を働かせ、感受性を豊かにさせたい。

3 単元の目標

目標について、別表「単元の目標一覧」をご確認ください。

4 評価規準

学習指導要領との対応等	評価規準例	〔知識・技能〕						〔思考力・判断力・表現力等〕		
		(1)ア	(1)ウ	(1)エ	(1)オ	(2)イ	(2)ウ	(2)エ	(2)オ	B(1)ア	B(1)イ	B(1)エ	B(1)オ
(1)ア	言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。	○											
(1)ウ	我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしている。		○										
(1)エ	文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。			○									
(1)オ	我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解している。												
(2)イ	古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解している。					○							
(2)ウ	古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解している。						○						
(2)エ	時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解している。							○					
(2)オ	言文一致体や和漢混交文など歴史的な文体の変化について理解を深めている。								○				
B(1)ア	「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。												
B(1)イ	「読むこと」において、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。												
B(1)エ	「読むこと」において、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。												
B(1)オ	「読むこと」において、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもっている。												
木曽の最期		○	○	○			○	○	○	○	○	○	
祇園精舎		○	○	○			○	○	○	○	○	○	
古文を読むために 6		○	○	○			○	○	○	○			
古文の窓 5						○			○				
単元の言語活動 6				○	○		○				○		○

〔主体的に学習に取り組む態度〕	
進んで音読する、平曲を聞くなどを通して「平家物語」特有の表現を味わい、軍記物語の文体の特徴について理解し、学習課題に沿って、それぞれの場面での登場人物の心情を深く読み取ろうとしている。	○
進んで音読することを通して「平家物語」特有の表現を味わい、軍記物語の文体の特徴について理解し、今までの学習を生かして、「木曽の最期」を脚本化し、物語に描かれた人物の心情を深く読み取ろうとしている。	○
	○
	○
○	

■言語活動例との関連（【　】は関連する指導要領の言語活動例）

単元の言語活動６　人物の心情を想像して「木曽の最期」を脚本化する【〔思・判・表〕　B(2)オ】